



第39回 The 39th Annual Meeting of Japan Organization of Clinical Dermatologists

日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会

会期 2023年 6月17日[土]・18日[日]

共催セミナー ランチョンセミナー4

テーマ アトピー性皮膚炎における
Shared decision making (SDM) とPRO

日時 2023年 6月17日[土] 12:10～13:10

会場 ロイトン札幌 第4会場 2F ハイネスホール 定員 220席

座長1 群馬大学大学院医学系研究科 皮膚科学 教授 茂木 精一郎 先生

演者1 すずらん調剤薬局 上荷 裕広 先生

小児アレルギーエデュケーター・薬剤師による
SDM支援とは？

座長2 広島市立広島市民病院 病院長 兼 皮膚科部長 秀 道広 先生

演者2 ちとふな皮膚科クリニック 院長 江畑 俊哉 先生

アトピー性皮膚炎におけるPROの活用
～軽症例での活用も踏まえて～

小児アレルギーエドゥケーター薬剤師によるSDM支援とは？

LS4-1

すずらん調剤薬局 上荷 裕広 先生



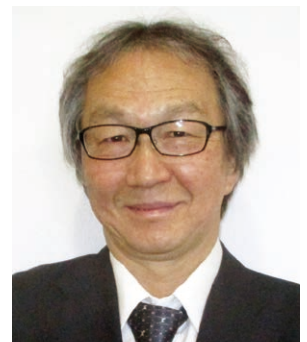
略歴 1985年 京都薬科大学卒
MR勤務を経て平成7年すずらん調剤薬局開局
小児アレルギーエドゥケーター (PAE)、アレルギー疾患療養指導士 (CAI)、CAI認定機構 理事
鈴鹿亀山薬剤師会 会長、三重県薬剤師会 理事、日本小児臨床アレルギー学会 理事

Shared decision making (SDM)は協働的意思決定もしくは共有意思決定と訳され、患者と医療者がお互いの情報を共有しながら一緒に治療方針を決定していくアプローチである。治療や患者ケアのための意思決定にはEBM (Evidence-based medicine) の要素を考慮すると共に、患者の価値観や環境なども含む総合的な判断が求められ、この意思決定の過程において医療者と患者が行うコミュニケーションがSDMである。SDMは医師だけが担うものではなく、看護師や薬剤師、ソーシャルワーカーなど他の医療スタッフなどが協力してチームとして実践していくことで、患者のより高い満足感や安心感が得られると言われている。日本小児臨床アレルギー学会が認定している小児アレルギーエドゥケーター (PAE) は、アトピー性皮膚炎などの小児アレルギー疾患患者に対して、アドヒアランスのアセスメントから導き出した必要な対応をさまざまなスキルを用いて支援を実行し、患者のアドヒアランス向上に貢献している。この指導スキルの一つであるカウンセリングはまさにSDMのプロセスのひとつである。患者の気持ちや思いを傾聴して共感することから、その奥に潜んでいる価値観を引き出し、患者自身に気づきを与えると共に価値観を共有し、より前向きな治療行動を引き起こさせるものである。今回は調剤薬局のPAE薬剤師として、治療に不安や不信を抱えるアトピー性皮膚炎患者の親子に対して、カウンセリングスキルを用いてどのような支援を行っているのか実例を示して紹介したい。医療スタッフが協働してSDMに関わることで、患者満足度を向上させることができると考える。

アトピー性皮膚炎におけるPROの活用 ～軽症例での活用も踏まえて～

LS4-2

ちとふな皮膚科クリニック 院長 江畑 俊哉 先生



略歴 1982年 群馬大学医学部卒業
1982年 東京医科歯科大学医学部麻酔科入局
1992年 東京慈恵会医科大学皮膚科入局
1999年 東京慈恵会医科大学附属第三病院皮膚科 診療部長 講師
2004年 ちとふな皮膚科クリニック (東京都世田谷区) 院長
2004年 非常勤講師 東京慈恵会医科大学 横浜市立大学
2004年 Visiting Professor, Wake Forest University (USA)

近年開発された生物学的製剤やJAK阻害薬による全身療法の導入はアトピー性皮膚炎 (AD) の治療に革命的な変化を及ぼしたことは周知の通りである。従来難治であった重症例の寛解導入を実現させ、さらには寛解維持における使用も試みられている。また重症例に限らず、皮膚病変スコアの一定の基準を満たせば中等症例にも適用でき、多くの患者のQOLの向上に寄与している状況である。ADの疾病負荷については重症例だけが問題ではなく、中等症、さらには軽症例においても痒みや外見上の問題、繰り返す症状、治療の負担などによりQOLの低下や心理的苦痛を来している。PRO (Patient-Reported Outcome, 患者報告アウトカム) は、臨床医や他の誰の解釈も介さず患者から直接得られる患者の健康状態に関する報告であり、それを評価する尺度として用いられるのがPROMs (Patient-Reported Outcome Measures) である。ADの痒み、日常生活や気分・精神状態への影響は、患者に聞かないとわからないことであり、治療の最終目標や治療方針、治療法を患者との合意形成の上で決定して進めていくうえでPROを重視した治療戦略は極めて重要である。ADの臨床試験や日常診療における症状や治療効果の評価指標の国際標準を討議、決定して提唱する組織であるHOME (Harmonizing Outcome Measures for Eczema) が推奨するADの主要評価項目の4つのドメインである皮膚徴候 (EASI)、皮膚症状 (POEM) と痒み (NRS)、QOL (DLQI)、長期コントロール (RECAP, ADCT) のうち、EASI以外はすべてPROMsである。演者らはADの日常診療にADCTを取り入れて疾患のコントロール状態を評価している。対象は当院を受診する12歳以上の全AD患者であり、中等症以上の症例における生物学的製剤の導入の判断や、寛解状態を維持できている軽症例におけるさらなる治療負担の軽減といった治療法の決定のためにも活用している。講演ではADCTの実際の運用方法を中心に述べたいと思う。